

川野里子歌集
『ウォーターリリー』

(短歌研究社)

第七歌集『歓待』から四年後に出版された第八歌集。あ
とがきにて「『歓待』を纏めたのち、私は語り手ではなく
聞き手でありたいと思うようになりました。(中略)短歌
の役割とは耳を澄ますことなのかもしれません。」と述べ
られている。確かにこの第八歌集は第七歌集に比べて幾分
詠み手の心が風んでいる、静謐さを感じさせられる一冊で
ある。また、歌集の中では繰り返し「ウォーターリリー」
の歌が登場する。悲惨さや、広大さといった、静謐とは離
れた歌とこの歌との並びが、一連の中に陰影をもたらず。

ウォーターリリーここに生まれてウォーターリリーこ
こがどこだかまだわからない

北爆へ飛び立つ爆撃機の軌跡ゆつくりたどりベトナム
へ飛ぶ

ウォーターリリーとどまることなくウォーターリリー
静止してをり白い睡蓮

多元宇宙のなかの銀河のそのなかの太陽から三番目
睡蓮咲いた

そして最後はこの歌で締めくくられる。

ウォーターリリーウォーターリリーウォーターリリー
そこにゐますね

世界の泥のような混沌の中、ただ静かに「ウォーターリ
リー」は佇んでいるのである。

(渋谷美穂)

塚田千束歌集
『アスパラと潮騒』

(短歌研究社)

北海道で、子育てをしながら医師として働く女性の第一
歌集。まず目を引くのは職業詠である。

硬すぎる襟をわずかに崩す昼 白衣しらじらしく肩に
かけ

制服でもある白衣をまとう自分を客観的に描写する。作
者は、自分が医師であることを全く偉ぶらない。

占冠・比布・和寒・音威子府 かわいい響きだから降
りたい

八幡坂振りむく君の顔遠く月日はひとを幼くさせる
一首目、下の句の素直な感じがよい。二日目、八幡坂は

函館湾へ向かってまっすぐに伸びる、石畳の美しい坂道。
月日が人を幼くさせるという矛盾がなぜか腑に落ち、まる

で逆光のように、読者になにかの感覚を呼び起こす。
常勤とならば半透明の我 通園バッグが首にからま

る

時短で働く作者。医師の世界にも、常勤のように働けな
いことへの後ろめたさがあるのだ。孤独で切ない。

うまれかわったらやさしくいきる草花の名前すべて覚
える

詠み終えて印象に残ったのは、肩書や役割を超えた、心
の奥底でかすかに泣いているような歌だった。

(片岡 絢)